

『論語』「子貢曰如有博施於民」章

関口 順

ただいまご紹介いただきました関口でございます。これより令和四年度の講經、『論語』雍也篇「子貢曰云々」についてお話しいたします。

お手元の資料をご覧ください。

子貢曰、如有博施於民而能濟衆、何如。可謂仁乎。子曰、何事於仁、必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也已。〔雍也〕

訓んでみます。「子貢曰く、如し博く民に施して、能く衆を濟ふ有らば何如。仁と謂ふべきか。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶諸を病めり。夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く取りて譬るは、仁の方と謂ふべきのみ」。

【論語】「子貢曰如有博施於民」章

弟子の子貢がお尋ねして、「もし広く民に恩恵を施して多くの人を救うことができるようであれば、それはどうでしょう、仁と言えましょうか」。「子曰く、何ぞ仁を事とせん」。「仁どころのことか」と、普通そういうふうに訳しておられますが、「仁にとどまろうか」という訳もあります。「仁」どころではなく、「必ずやそれは聖だ」と孔子は言っています。聖人、聖王とされている堯舜ですらも、そういうことは実現できていないんじゃないか、自分はやれてないんじゃないか、と心配していたことだと言っています。それに比べて仁者というのは、自分が立つ、「立つ」というのは訳しづらい言葉なんです、「三十にして立つ」の「立つ」と同じで、社会に出てちゃんと一人前としてやっていくということです。ここでは「ちゃんと物事をや

る」ぐらいの訳にしておきます。何か物事をなそうとしたときに、そうしたことを人ができるようにしてあげる、ということですよ。自分が達せんと、「達せんと」というのは、これも訳しづらくて、「達」は社会に出て事業か何か始めて、一角ひとかどの、ある程度の業績を挙げたり、また、ある程度の地位に上ったりすることだと思うんですが、それも訳しづらいんで、ここでは、ちゃんと物事をやり遂げたいと思つたときには、人がそうできるようにしてあげる、としておきます。仁者というものはそういうものだ、ということですよ。そして、よく自分で自分自身を考えてみて、他人もそうであろうと察知する、それは仁者となる道と言えるだろう、と。

つまり、この章には、二つ重要な内容があると思えます。一つは、聖人というものが出てきて、堯舜の聖、聖王ですね、それで、それと自分たちは違うんだ、違うんだというのはいさ言過ぎかもしれませんが、聖王は「何ぞ仁を事とせん」のレベルにあるんだ、ということですよ。

それから、もう一つ、「夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」、これは孔門の立場、自分たちはこれで行くんだとはつきり宣言しているわけで

すね。これは今日的な意義も充分ある（二）、いい言葉だと思えます。

堯舜というのは、『論語』の中で他ほかに出てくるのは、憲問篇に出てきまして、「堯舜も其れ猶諸を病めり」が、全く同じ言い回しで出てきております。

子路問君子。子曰、脩己以敬。曰、如斯而已乎。曰、脩己以安百姓。脩

己以安人。曰、如斯而已乎。曰、脩己以安百姓。脩

己以安百姓、堯舜其猶病諸。〔憲問〕

そこで、すこし訓んでみますと、「子路 君子を問ふ」、君子というのはどういうものですかと質問したときに、「子曰く、己を脩おそめ以て敬す」、修養して身を慎む、それが君子というものだと。「曰く」、子路曰くですね。「斯かくの如きのみか」、それだけですか、と聞いています。孔子がそれに答えて、「己を脩め以て人を安んず」と。「人を安んず」とは、まわりの人が安心してそれぞれうまくやっていると、まわりの人が安心してそれぞれうまくやっていると、斯かくの如きのみか」、子路がまた聞いた。そうすると、「己を脩め以て百姓ひやくせいを安んず」、天下の人民が安んじてところを得て暮らしていけるようにすると答えています。「己を脩め以て百姓を安んず」のところで、「堯舜も其

れ猶諸を病めり」が出て来ていますね。

この憲問篇では、君子とはどういうものかを尋ねており、孔子は君子の在り方として答えているわけですが、三段階あつて、それぞれ差があります。三段階あつて差はありますけど、「君子」として連続している。前の雍也篇の場合は、「何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か」の「聖」に、仁者の立場をそれに対して打ち出して、**「聖人」と「仁者」**はだいぶ違うと思うんですね。

で、堯舜というのは一体いつごろから出てきたのか。堯と舜ですけれども、これは戦国時代からだと大体いわれておりまして、『孟子』の中に、孟子と弟子が堯舜について問答をするというのが出てきております。それで、いろんな、当時のまあ伝説ですかね、そういうものを議論しているのですが、中には、孟子が「そんな説を信じちゃいかん」と弟子を戒めているようなものも混ざっていて、まだ固まっていなかった。孟子のころは、孔子より二百年ぐらい後のことですが、まだ固まっていなかったと言えるところです。ところが、それからまた二百年ぐらい経って司馬遷の『史記』になると、もう完全に歴史のことになって、「五帝本紀」の四番目が堯で、五番目が舜だと

いうことで、もう完全に歴史上の人物ということになっております(二)。

それで、堯舜はどういうふうなイメージされていたかということなんですが、『史記』は『尚書』を材料にしていて難しいので、『十八史略』を代わりに使います。堯、天下を治むること五十年、ただ、自分の政治がうまくいつてるのか、ちゃんと治まつてるのか、考えても全然分からない。周りの者に聞いても分からない。役人に聞いても分からない。それで、お忍びで街へ、外へ出てみた。そうすると、子どもとか老人たちが道でたむろしてるんですね。そこで、民心を探るといふことなんですが、その老人の歌っていた歌がそこにある「撃壤歌」というものです。

日出而作、日入而息、鑿井而飲、畊田而食、帝力何有於我哉。〔『十八史略』撃壤歌〕

「撃壤歌」の「撃壤」がどういふものかは、良く分かりません。今でいえばゲートボールとかポッチャとか、そういうたぐいの路上でできるゲームのようなものと一応考えられます。腹いっぱい食べて、そういうもので遊んでる。そうして、歌を歌ってる。

歌は、「日出でて作し」、農作業をしてですね、「日入り

て息ふ」と、日没とともに家へ帰って休む、「井を鑿ちて飲み、田を耨して食ふ」、井戸を掘って水を飲み、田を耕して食物を食らう、このように自分は自由に自分の労働で生きると、楽しく生きると、「帝力何ぞ我に有らんや」、堯帝の政治の力なんかどこにもないぞ、とそう歌っている。これを傍で聞いた堯は非常に安心して、喜んで帰った。

これは伝統的に言われている「無為の治」、何も殊更なことほしない「無為」の政治と言われているものでして、もう、人民が、政治の恩恵とか、また、支配されてるとか、何かさせられてるとか、そういうことを一切意識することなしに、みんながみんな、ところを得て楽しく暮らしている、最高の政治だということに昔からなっているわけです。それを行ったのが堯だ、また、舜だということですから、まあ、そういうイメージが出来上がっていく過程において、民間にいる孔門と隔絶ができるのはやむを得ないことですね。憲問篇のほうは三段階でも一応は連続してまずけれども、雍也篇は聖王との間はかなり開きがある。

それで、その開きのある聖王と孔門、孔子たちとの間の関係はどうなっているかということですが、雍也篇の次

に、「子曰く、述べて作らず、信じて古を好む、…」で始まる述而篇というのがあります。

子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭〔述而〕

この「述べて作らず」から次の篇が始まって、篇としては分かれるのですが、雍也篇の最後の「子貢曰く」の章と述而篇の最初の「述べて作らず」は、章としては並んでいきます。つまり、「述べて作らず」というのは、何を述べるかということ、それは堯舜の業績を述べる、つまり祖述顯彰する、何を作らないのかということ、堯舜のあととは自分たちが創作したりすることはない、また出来ない、そういうことです。聖王の堯舜と我々との関係はそういう関係だということ、述而篇の「子曰く、述べて作らず…」というのできてるわけです。ですから、『論語』を編纂した人はそこをよく考えていたな、ということが言えると思います(三三)。

それで、最後の附録に「譬」の字の訓みというのを書いておきました。私の訓みでは、「譬」というのを「x」としてと訓んでおり、これは、一応朱子の注に基づいたつもりです。ここは、これまで「たとえる」と訓むのが、どちらかというと一般的なのですが、何で「たとえる」と訓むの

か、ちょっと私には分からなかったので、「さるとる」と訓んだ次第です。それを説明するには、かなり細かい考証とか、証拠が必要ですので、それは来年出る『斯文』誌上に書いておきたいと思います（四）。

以上であります。ご清聴ありがとうございました。

補説

(一)「夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人」という言葉のもつ「今日的意義」について

これは、拙稿「阿部謹也の「世間」論—和辻哲郎「間柄」論（倫理学）」との通底性（『歴史文化研究（茨城）』第九号 二〇二二年。埼玉大学の学術情報レポジトリ SUCRA からダウンロード可能）末尾において、その一端を指摘しておいた。いまそれを簡明に紹介すると、

阿部謹也の「世間」論と和辻哲郎の「間柄」論（倫理学）が共通して示すように、日本を含む東アジアにおいては、「人と人との関係」が社会構成の基盤をなしており、それは社会組成の特質として重要である。だから、日本において「個人」を確立しようとするなら、その「個人」は「人と人との関係」に基礎づけられている必要がある。

『論語』「子貢曰如有博施於民」章

この「夫れ仁者は、己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」は、他者（「人」）との関係の中で自己（「己」）という社会的にして主体的な個人（「仁者」）を確立しようとするとき、我々の思考を導くその意義は実に大きい。講経のなかでも指摘したが、「立」も「達」も社会的背景の下に使われた語である。こういう言葉は、誰でも言える、という類のものではない。

(二) 堯舜が太平の治を実現したという認識は、何時頃までのこっていたか

戦国時代から登場したと見られる聖王堯・舜は、いつ頃まで、歴史上実在した人物と考えられていたのか。日本では、白鳥庫吉（しらとりくらきち）『尚書』の高等批評（特に堯舜禹に就いて）（『明治四十五年四月』『東亜研究』第二巻第四号）『白鳥庫吉全集』第八巻に所収。これは、明治四十五年（一九一二年）二月二十二日に漢学研究会において行われた講演である）以降が、中国では『古史弁』（一九二六年第一冊刊行。全七冊）以降が、実在しなかったとする認識の広まる起点となるだろう。

しかし、それが知識社会で一般化したのは昭和になって

からだと思われる。大正十三年に発行された宇野哲人『儒学史』も、第一章は序論に当て、史的叙述の第二章は堯舜の「唐虞時代」から始めている。個人的な事例で恐縮だが、私がこの学問に進んだ頃（昭和四十年代後半、一九七〇年代前半）、明治四十年生まれの父と話をしている、「えっ—堯舜で、いなかっただのか？」とビックリされ、逆にこちらの方がビックリした記憶がある。

(三)「述べる」対象である堯舜など聖王の業績について
これは、朱子の注をそのまま訳して掲げておくのが、最も簡明にその内容（つまり、知識人たちの意識の内容）を伝えてくれる。「孔子は詩・書を編集整理し、礼・楽を正定し、周易を解説し、春秋を修定した。いづれも、堯舜など先王伝来の業績であつて、孔子が自分で創つたものなど無い。だから、このように仰つたのだ。…孔子の当時、作者の聖王はほぼ出揃つていたので、夫子は、それら聖王の偉大な業績を集大成し、標準化したのである。その事業の性質は「述」だとしても、その功績は「作」に倍するものである。…」

『墨子』等の諸子文献を見れば分かるとおろ、堯舜などの聖王概念は、孔門（つまり儒）を含む広い一般的な知識

社会で形成されたとみられる。故に、孔門からみれば、自分たちの活動をそれら聖王の事績と何如に関係づけるかが、理論的に解決しなければならぬ思想的課題であつた。この「述べて作らず」は、その課題へのあざやかな解答である。朱子が解説した孔子の「事業」内容は、『史記』孔子世家において、すでもう「歴史事実」化されている〔孔子六芸刪述の説〕。

編纂し終わつた『論語』においては、孔子と聖王とを切り離せない二つの極とする思想文化体系（後の、私のいう「儒学」、つまり「旧文化」）の核心が朧げながら構造化されていた、ということが分かる。

また、それは、『孟子』を最終的に編纂した人が、その末尾に堯・舜・禹・湯・文王・孔子の業を受け継ぐ孟子の決意を配し一書全体の締め括りとした所以でもある。

(四)「譬」字の訓みについて

本講經における「譬」字の訓みは、朱子集注「譬、喻也」に従っている。ただ、「喩」を「さ」とる」と訓んだことについては、理由の説明が必要であるう。何故なら、『論語』の注釈書は、管見のかぎり、すべてこの「譬」を「たとえ」または「たとえる」と訓んでおり、厳密に朱子の注に

依拠する解釈もその例外ではないからである。「さとる」という訓みについて、識者のご検討を乞う次第である。

「能近取譬、可謂仁之方也已」部分の朱子注…譬、喩也。方、術也。近取諸身、以己所欲、譬之他人、知其所欲亦猶是也。然後、推其所欲以及於人。則恕之事而仁之術也。…「さとる」と訓む理由…

①最も大きな理由は、朱子の注「近取諸身、以己所欲、譬之他人、知其所欲亦猶是也。然後推其所欲、以及於人、則恕之事而仁之術也。…」の「譬」を「たとえる」と訓めば文意の把握に苦しむが、「さとる」と訓めばスムーズに理解できることである。

「知其所欲亦猶是也〔其の欲する所も亦た猶是^かのごときを知る〕」の部分には、「譬之他人〔之を他人にさとる〕」をていねいに説明していると考ええる。「其所欲」の「其」は、「他人」を指す。しかし、「然後推其所欲〔然後後ち其の欲する所を推し〕」の「其」は「己」である。それでこそ、「人に及ぼす」ことができるし、次の「恕」につながる。

②ここで朱子が注解に用いた「喩」字は、『論語』本文を調べると、里仁篇第四「君子は義に喩り、小人は利に喩る」一章にだけ出現している。この「喩」は「喩、曉也」と注

【論語】「子貢曰如有博施於民」章

が付され、「さとる」の意味である。この雍也篇第六に「譬、曉也」と注しないで「譬、喩也」としたのは、上文を承け、本文の語「喩」で注を施したためと考える。

③『論語』本文に「譬」字の出でくる章は、ここ以外に五つある。それらの「譬」はみな「たとえる」の意味で使われている。そして、それらの箇所では、朱子は絶えて注を施していない。ここでのみ注を付しているのは、ここはそれらの箇所とは異なる意味なのだ判断するのが妥当である。

④『論語集注』の注を調べると、「喩」は他の章でも注解の中で使われている。その場合「さとる」の意味の時もあれば、「たとえる」の意味の時もある。しかし、その頻度を調べると、「さとる」は十一章にわたって十三字あり、「たとえる」は四章にわたって四字である。多くは「さとる」の意味で使われているので、ここを「たとえ」「たとえる」と訓む方が、むしろ説明を必要とする。

(埼玉大学名誉教授)